「自主自律の学び」を研究・支援する

TOKYO KASEI UNIVERSITY

東京家政大学 学修・教育開発センター

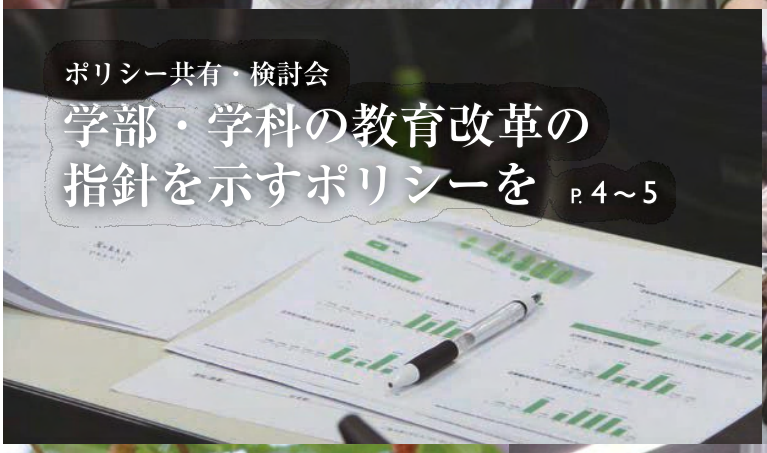
クレッド通信
2017.7

CRED通信 07

Center for Research and Educational Development

新入生歓迎交流会
学生CRED（仮称）企画第１弾！！ P.2～3

manabaを通した
栄養科e-learning推進計画 P.12



ポリシー共有・検討会
学部・学科の教育改革の指針を示すポリシーを P.4～5

立教大学経営学部
BLPの体験ワークショップ P.8～9

IR報告
初の1・3年生調査実施 P.10～11

ラーニングコモンズ
学びへの誘い（いざな） P.6～7

先輩のノートを真剣に見つめる新入生
（学科別交流／栄養学科）

ライブペインティングに興味津々
（学科紹介／造形表現学科）

人形劇で学科を紹介
（学科別交流／児童学科）

第１回

新入生歓迎交流会

―― 学生 CRED（仮称）企画第１弾！！

2017年5月18日（木）15：10～17：30 / 16IC講義室 / 参加者：学生86名（上級生30名、新入生56名）、教員9名、職員7名

これからの学生生活に向けて

第１回新入生歓迎交流会に携わらせていただきました、児童学科３年の平田彩花です。この会は「期待や不安を抱いた新入生を歓迎し、交流する」ことを目的として、開催しました。私たちが入学した当時を思い返してみると、不安なことが多くある中誰に聞けば良いのか分からず、戸惑うことが多かったように思います。「今年入学した１年生も同じ気持ちなのではないか」「私たちが上級生となった今、新入生にできることがあるのではないか」という思いから、この新入生歓迎交流会を企画させていただきました。

この会は、学生CRED※だけでなく、各学科の上級生にも「上級生スタッフ」として、企画の段階から協力していただきました。新入生歓迎交流会は今回が初めての試みだったため、不安や悩みも多くありましたが、CRED教職員の方々や上級生スタッフの方々と会議する中で少しずつ形になっていきました。

第１回新入生歓迎交流会はアイスブレイクから始まり、二部構成で開催しました。まずアイスブレイクとして「学科当てクイズ」を行いました。とても盛り上がり、会場全体が温かい雰囲気となりました。一部は、学科ごとにブースを作り、同じ学科の先輩（上級生スタッフ）と新入生の交流でした。同じ学科の先輩とお菓子を食べながら楽しく交流し、授業や課題について話し合う様子が見られました。そして二部は、新入生が他学科のブースに移動し、その学科の「学科自慢」を聞くという他学科交流でした。各学科の特色を生かした学科自慢はとても面白いものとなりました。

私が新入生歓迎交流会に関わらせていただいて、とても嬉しく思ったのは「この会に参加できてよかった」という声をたくさん聞けたことです。この言葉は新入生だけでなく、上級生の方からもいただきました。今回の新入生歓迎交流会が、新入生の不安を少しでも取り除き、上級生にとっても楽しく交流する良い機会となりましたなら、嬉しい限りです。

今回の新入生歓迎交流会は第１回として開催し、次回につなげていきたい点、考え直したい点が明確になりました。第２回新入生歓迎交流会をより素晴らしいものにするために、これからも多くの学生・教職員の方々と協力しながら活動していきたいと思っています。最後に、第１回新入生歓迎交流会の企画・運営にご協力いただきました上級生スタッフの皆様、新入生募集の呼びかけ等にご協力いただきました教員の皆様、そして私たちの活動を支えてくださったCRED教職員の皆様、本当にありがとうございました。

「人の心がわかりそうだから、心理カウンセリング学科！」「大正解！」
（学科宛てクイズ／アイスブレイク）

平田 彩花（ひらた あやか）
児童学科３年

※学生CRED（仮称）　学生企画委員として「第３回学生と教職員の交流会」の企画・運営に関わったことをきっかけに、「家政大をよりよくするために何かしたい」という思いから活動し始めた学生団体です。「家政大を、自分たちの学生生活をより良くするために」をモットーに、様々な企画を考え、運営していくことを目的としています。

各学科の上級生スタッフが手作りの学科紹介冊子を作成した

インタビュー（漫才）形式の紹介でみんな笑顔に（学科紹介／短大保育科）

「自主自律の道を歩み始める学生を支援する」とは（職員の立場から）

学修・教育開発センターの目的の一つに「自主自律の道を歩み始める学生を支援する」ことがあり、本交流会はまさにその活動事例の一つです。では、ここでいう「支援」とは何を指すのでしょうか。交流会を終えた現在、私個人としては「学生主体の活動に対し、職員ができることはあまりない」というのが率直な感想です。なぜなら、彼女たちが“まずは自分たちで考える”ことを忘れず、交流会の企画に取り組んできた様子を間近で目撃したからです。ある学生は、「自分の学科の新入生の応募が少ないから授業に呼びかけに行きたい」といい、また別の学生は「まず大学の授業がどういうものなのかを教えてあげたいから、ノートの取り方をまとめて、配布しようと思う」と相談してくれました。“自分たちにできることは何か”を考えて、取り組むその様子はまさに「自主自律」を体現した姿であり、ＩＲ報告（本通信p10-11）で指摘されている「まじめだけれどおとなしい東京家政大学生」像を覆すものでした。そしてもしかすると、ここに「支援」のヒントがあったのではないかと思うのです。つまり、職員は学生が気軽に相談することができる「場」ではあるけれども、最終的に答えを出すのは学生自身であるように「支援」することが１つ重要な点ではないかと感じています。

活動はまだ始まったばかりです。まさに「自主自律の道を歩み始めた」彼女たちにぜひこれからもご注目ください。

矢野 穂（やの みのり）
学修・教育開発センター

「学生参加型FD」としての「学生CRED（仮称）」の意義と目的：Student-Faculty Partnership

FD（Faculty Development）は、大学の授業や教育の改善のために教職員が主体的に取り組む活動として認識されてきた。私立大学におけるFD活動を考えるとき、「マーケティング」の視点で大学全体の向上を図ると分かりやすい。大学は組織であり、組織としての最終目標は３つのポリシーに明記してある。いっぽうで、組織メンバーである教職員は、“利用者”である学生が何を必要としているのか、何が足りないのかを理解しなければならない。さらには、組織のもつ目的や商品（教育・学修環境）について利用者の理解を得るために、お互いのコミュニケーションを図ることも必要となる。そのコミュニケーションに基づいて、双方にとって有意義な状況を“創造”していくことでFDが実現化されていく。

学生の視点を考慮するためには、アンケート調査だけでは不十分で、学生が自らの視点を自主的に発信し行動できる“公式な”場や機会を設けることが不可欠となる。そうした学生視点の“公式な”場として、今回試行的に立ち上げたのが「学生CRED（仮称）」であり、これは本校における「学生参加型FD」である。

「学生CRED（仮称）」は、学生自身の居場所である大学が、学生にとって大事な場所、意味のある場所として感じられるようにするにはどこに意識を向けるべきなのか、どのような取り組みができるのか、について少しでも考え、教職員と共に前向きに取り組んでいく場である。「学生CRED（仮称）」が目指す具体的な取組みは、これから学生と教職員と協働で立案・実施していくことになるが、ここでは私案として立命館大学や追手門学院大学などの「学生参加型FD」を参考に下記の叩き台を挙げてみた。

1）授業に対する学生の声の集約
授業アンケート、学生と教職員との交流会

2）学生の“視点”を生かした授業展開
学生視点の設問による独自の授業アンケート発案、学生視点によるシラバスの発案

3）学修意欲の向上
『新入生との交流会（今回の報告）』、学生と教職員との交流会、アートキャンプほか

4）学修環境の整備
学生発案の図書館環境（ライブラリーメイツ）、学生と教職員との交流会

本学には学修意識の高い学生がおり、彼女たちは様々な取り組みを推し進める力を持っているのは間違いない。この点は、日々の授業や交流を通して教職員自身が感じており、実際に昨年度までのIR報告でも明らかにされている。教職員は学生がまだ“発揮しきれていない”力を信じて、その力を引き出しながら一緒に大学をよくしていく、このことが今回紹介する「学生CRED（仮称）」の第一義だと考える。

【参考文献】
1.木野 茂（2010）、「学生とともに進めるFD」、『大学教育学会誌』32（2）：51-54
2.服部憲児（2012）、学生参加型FDの現状と実戦上の課題、『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』38：197-213

大西 淳之（おおにし じゅんじ）
本学栄養学科教授（生化学研究室）、学修・教育開発センター参事。

ポリシー共有・検討会

学部・学科の教育改革の指針を示すポリシーを

平成29年3月29日（水）9：30～12：00 ／ 16IC講義室 ／ 参加者：教職員52名

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）
各大学、学部・学科等の教育理念に基づき、どのような力を身に付けた者に卒業を認定し、学位を授与するのかを定める基本的な方針。学生の学修成果の目標ともなる。

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）
ディプロマ・ポリシーの達成のために、どのような教育課程を編成し、どのような教育内容・方法を実施し、学修成果をどのように評価するのかを定める基本的な方針。

アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）
各大学、学部・学科等の教育理念、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーに基づく教育内容等を踏まえ、どのように入学者を受け入れるのかを定める基本的な方針。受け入れる学生に求める学習成果を示すもの。

ここ数年、大学の教員・職員が「３つのポリシー」を意識する機会・場面が増えています。３ポリシーは、平成17年の「我が国の高等教育の将来像」答申ではじめて登場して以降、中央教育審議会答申において繰り返し言及されています（平成20年「学士課程教育の構築に向けて」、平成24年「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」、平成26年「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」）。そして、平成28年3月31日に改正、平成29年4月1日に施行された「学校教育法施行規則の一部を改正する省令」において、ついに３ポリシーの策定と公表が大学の義務とされるに至りました。この改正に合わせて公表された「卒業認定・学位授与の方針」（ディプロマ・ポリシー）、「教育課程編成・実施の方針」（カリキュラム・ポリシー）及び「入学者受入れの方針」（アドミッション・ポリシー）の策定及び運用に関するガイドライン」（以下では「ガイドライン」と略称します）では、大学に求められる種々の改革を実現する上での指針として、３ポリシーが極めて重要な役割を担うということが強調されています。

本学では平成21年度に、全学科のディプロマ・ポリシーとアドミッション・ポリシーを定めており、平成26年度にはカリキュラム・ポリシーも全学科で定めました。３ポリシーは大学ホームページで公表していますので、策定と公表についての義務は一応果たしています。しかし、ポリシーを最初に策定してから８年間、大きな見直しをしておらず、ガイドラインに示された「留意すべき事項」（たとえば、「ディプロマ・ポリシーにおいて、学生が身につけるべき資質・能力が具体的に明示されているか」、「カリキュラム・ポリシーにおいて、能動的学修の充実等、大学教育の質的転換に向けた取組みの充実が重視されているか」、「大学教育を充実させるために、３ポリシーを起点とするPDCAサイクルが確立しているか」等々）に照らすと、現行の３ポリシーとその運用は十分だと言えません。また、平成31年度に全学的にカリキュラムを改訂することが決まったこともあり、平成28年度から29年度にかけて、全学でポリシーの見直し作業を進めることになりました。そして、28年度末の時点における中間成果報告会として、①学部および学科ごとに見直し途上の暫定版ポリシーを全学で共有する、②学外識者の意見を伺い今後の見直し作業を進める上での参考にする、という２点を主な目的として企画したのが、「ポリシー共有・検討会」です。

平成28年3月29日午前に開かれたポリシー共有・検討会では、現行のポリシー（ディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシー）を各学部長、学科長に説明いただいた後、山地弘起先生（大学入試センター教授）、栗田佳代子先生（東京大学准教授）、佐藤透先生（桐蔭学園教諭）のお三方からコメントをいただきました。外部の先生方のご指摘は非常に的確であり、学外からの視点は新鮮かつ刺激的でした。学内からも多くの質問があり、活発な意見交換が行われました。本学のこれからのポリシーの策定と運用を考える上で、多くの課題と収穫が得られた一日でした。

Report
井上 俊哉
（いのうえ しゅんや）

本学心理カウンセリング学科教授（心理統計研究室）、学修・教育開発センター所長。
平成3年本学着任 / 研究分野：教育心理学、心理統計学 / 著書：『メタ分析入門』（東京大学出版会）、『心理検査法入門』（福村出版）、『心理統計の技法』（福村出版）

山地 弘起　先生
大学入試センター 教授

栗田 佳代子　先生
東京大学准教授

佐藤 透　先生
桐蔭学園教諭

誰もがわかる言葉の強みを実感

環境教育学科　藤森 文啓

少子化問題、首都圏定員管理に加え経済の流動性から文科系が人気の時代、理科系が人気の時代の波を乗り越えて大学で何を学ぶことができるのかを、学びを提供する側（大学）がこれまで以上に真剣に考えなくてはならない時代と認識した。特に大学で何を学ぶことができるのか、どんな人材育成を行うのかを単に明文化することではなく、真に各学科が目指すゴール自体を明確化し、大学である以上専門学校化することなく、専門知識の教授を実施することのできるカリキュラム、教員の準備が必要との認識にも至った。つまり、教育の基幹となる理念、目標を構成教員が共通に理解することが必須で、その上でのカリキュラム、アウトプットとしてのポリシーなのだと。専門教育を主体とすると大学教員が提示するポリシーは難しい言葉の羅列となりがちであるが、万人が理解できる言葉、情景でポリシーを提示しなくてはならないことも今回の会議に出て気付かされた点でもある。

今、求められていることを知る機会

英語コミュニケーション学科　太田 洋

「大学名を隠してしまうとどれ（ディプロマポリシー）がどれだかわからなくなります」「もっとわかりやすく示してください」（講師の先生方からいただいた言葉）私が今後ディプロマポリシー（以下DPと略）、カリキュラムポリシー（以下CPと略）を改めて考え改善していく際に心に留めておきたい言葉であった。他にも「読み手はだれかを考える」「大学を知るための基本情報としてのDP,CPにする」「具体化・体系化して、シラバスのどの部分がDPに当たるのかをチェックする」「科目のつながりを考える」等々、ポイントをたくさん得ることができた学びの多い研修会となった。また、それぞれ立場の違う講師の先生方からのお話を聞き、今の状況を知ることができたことも大きな収穫となった。いろいろな改革が求められる今、何が趣旨か、背景は何か、他の状況はどうかなどのことを学ぶ大切さを感じた研修会であった。

ステークホルダーを意識したポリシー

心理カウンセリング学科　三浦 正江

本学科では、WGや科内会議で十分に議論してポリシーの改訂を行った。そのため、それなりのポリシーを作成したつもりで「ポリシー共有・検討会」に参加した。しかし、有識者からのコメントを聞き、ポリシー作成のそもそもの目的が抜け落ちていたことを痛感させられた。つまり、ポリシーとは「高校生をはじめとした一般の方々に広く読んでいただき、理解していただくもの」なのである。にもかかわらず、今回の改訂では「伝えたい相手にうまく伝わるか」という当然の視点からポリシーを検討することがなかった。私の専門である心理学には、「伝える内容と同時にどのように伝えるかが重要である」とする「効果的な情報伝達」に関する研究があるのに、すっかり忘れてしまっていた。参加前は、心のどこかに「どうせポリシーなんて難しくて誰も見ない」という気持ちがあったように思う。しかし、参加後には「読んでもらうポリシーにしよう！」とスッキリ前向きな気持ちになることができた。

看護学科のCP・DPを見直して

看護学科　安達 祐子

ポリシー共有・検討会に参加して、他学科と比較しつつ本学科の３Ｐを改めて見直す機会となった。看護学科ではDPとして卒業までに看護の実践力を身につけるための５つの能力を掲げ、CPはそれに沿って教育課程を編成しており、DPとCPの整合性はおおよそとれているが、DP５の国際的視点から看護を実践する能力に関するCPが不足していること、DPについてはやや抽象的であるとの指摘を受けた。DP５をCPに追加すること、DPの表現として読み手を意識した具体的な能力として表現することで学生が自己評価しやすいものとなるよう、今後検討をすすめたい。また、CPについては、看護教育の特色である主体的学習方法＝実習や演習をどのように表現していくか、学習成果を評価する方法について、より具体的に表現していくよう検討したい。全体の感想としては、大学としての３Ｐのもとに各学部・学科の３Ｐを設定する必要があるのではないかと思われる。

CRED TOPICS
クレッド トピックス

ラーニングコモンズ

学びへの誘い（いざな）

東京家政大学ラーニングコモンズが設置されて２年目です。板橋・狭山図書館共に活発に使用されています。板橋図書館ℒプラザでは「学びへの誘い（いざな）」としてさまざまなイベントを実施してきました。ここで振り返ってみたいと思います。

オープニングイベント

2016年3月1日（火）

川合学長、ラーニングコモンズ運営委員会新関委員長、新井図書館長によるテープカットが行われ、板橋図書館１Ｆにℒプラザがオープンしました！（当時の学長・図書館長です）

ℒプラザオープン記念講演会

2016年5月12日（木）

能澤慧子先生

版画芸術とファッション
-ポショワールのファッションブック-

ℒプラザオープンを記念して、服飾美術学科の能澤慧子先生より、美しい版画芸術の世界についてご講演をいただきました。講演後は、能澤先生解説付きで図書館所蔵貴重書を参加者に特別公開しました。

アクティブ・ラーニング講座

2016年3月26日(土)
山梨大学 塙雅典先生
第1回　反転授業レクチャ

2016年5月21日(土)
東京大学 吉田塁先生
第2回　アクティブラーニングを取り入れた授業デザイン

2017年2月1日(水)
立教大学 舘野泰一先生と立教大生
立教大学BLP
（Business Leadership Program）
ワークショップ

第1回 東京家政大学ビブリオバトル

2016年12月13日(火)

学生チームvs教職員チームに分かれて、自分の好きな本を紹介するビブリオバトルが開催されました。学生バトラーには、環教４年、英コミ４年、教福２年の学生３名が、司会進行役には短大栄養１年の学生が参加し、和やかな雰囲気の中、開催されました。熱いバトルの後は、学生・教職員バトラー、聴衆の方とでわきあいあいビブリオトークを楽しみました。

初代チャンプ本

連続講座 *Kasei no Wa*

本学の教職員、学生が講師となり、研究成果や日頃の活動を発表する、昼休み30分開催のショートセミナーです。その時のテーマに関する図書につき、図書館内で当日だけなく展示を行っています。先生からのご推薦本も並び、*Kasei no Wa* の展示本があるところは話題提供の場となっています。

第1回　2016年6月28日（火）
片田真一先生（環境教育学科）
虫を捕まえながら、
生命の多様性を知る

第2回　2016年7月6日（水）
森田幸雄　先生（栄養学科）
夏、食中毒に気を付けましょう！

第3回　2016年9月28日（水）
阿部藤子先生（児童教育学科）
子どものことばの学び
－小学校の教室から－

第4回　2016年10月19日（水）
新関隆先生（環境教育学科）
元素をめぐる話
－新元素ニホニウム命名を記念して－

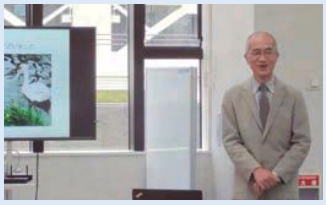
第5回　2016年11月2日（水）
重村泰毅先生（栄養学科）
機能性食品に興味ありませんか？
－コラーゲンペプチド研究の最新情報－

第6回　2016年11月16日（水）
田中恵美子先生（教育福祉学科）
障害との出会い

第7回　2016年12月20日（火）
ジャズ研究会（学生サークル）
連続クリスマス・コンサート
演奏曲：Blue Christmas, The Christmas song, Amazing Grace, ほか3曲

第8回　2016年12月21日（水）
ハンドベル部（学生サークル）
連続クリスマス・コンサート
演奏曲：ジングルベル、もろびとこぞりて
～きよしこの夜、やさしさに包まれたなら～

第9回　2017年5月23日（火）
三浦正江先生（心理カウンセリング学科）
ストレスと上手く
付き合っていくために



第10回　2017年6月6日（火）
谷田惠司先生（英語コミュニケーション学科）
突発的人体発火
－イギリス小説から文学と科学の接点を考える－

第11回　2017年6月12日（月）
山本和人先生（教育福祉学科）
「赤毛のアン」の魅力

第12回　2017年6月20日（火）
手嶋尚人先生（造形表現学科）
異文化としてのイタリア

第13回　2017年7月4日（火）
ジャズ研究会（学生サークル）
連続七夕コンサート
演奏曲：たなばたさま、アンソロポロジー
A列車で行こう　他

第14回　2017年7月5日（水）
ハンドベル部（学生サークル）
連続七夕コンサート
演奏曲：となりのトトロ、私のお気に入り
（「サウンド・オブ・ミュージック」より）、
Summer（「菊次郎の夏」より）　他

これまで大勢の先生方、学生の皆さんのご理解とご協力により、*Kasei no Wa*「家政の輪」が「家政の和」となり、回数を重ねてまいりました。これからもラーニングコモンズからみんなの *Wa* を発信していきたいと思います。そこは自分の世界が広がる*Wa*！ラーニングコモンズの次の*Wa*で、是非、ご一緒しませんか！！

執筆 / ラーニングコモンズ運営委員会

立教大学経営学部
ビジネス・リーダーシップ・プログラム
BLPの体験 ワークショップ

2017年2月1日(水) 13:30～16:00 / 板橋図書館 Lプラザ
参加者：学生29名、教員8名、職員13名

2017年2月1日に、立教大学経営学部のコアカリキュラムである「ビジネス・リーダーシップ・プログラム（通称BLP）」の体験ワークショップを実施しました。BLPについては、CRED通信06で紹介していただいておりますので、詳細はそちらをご参照ください。

本ワークショップの目的は、（1）今求められているリーダーシップとはどのようなものか、（2）自分なりのリーダーシップの発揮方法とは何か、の2つについて学ぶことです。プログラムは約2時間で、学生の体験が中心となっています。

今回は正課課程外のプログラムとして、30名の参加者を応募したところ1日で枠が埋まりました。1年生から4年生まで幅広い学生が参加してくれました。当日はワークショップのサポートとして、立教大学経営学部の1年生（学内で「リーダーシップ入門」（BL0）の授業を受講済みで、17年度Student Assistantを担当）が10名参加しました。

ワークショップの概要は以下です。（時間は目安です）

1）リーダーシップのイメージとは？（10分）
2）アイスブレイク（自己紹介・自分の地元を自慢しよう）（10分）
3）リーダーシップ目標の設定（10分）
4）ビジネスプランの作成（10分）
5）プレゼンテーション（10分）
6）学生同士の相互フィードバック（10分）
7）振り返り（5分）
8）まとめ（5分）

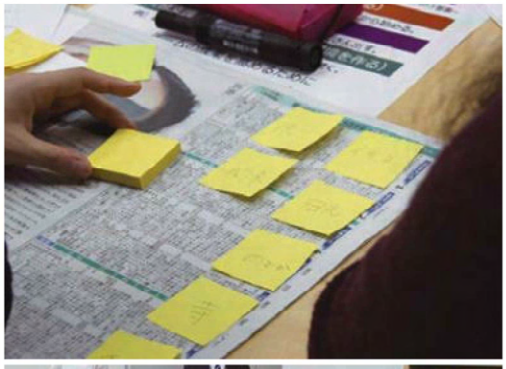
最初はリーダーシップについて「学級委員などの役職についている人」などを連想する人が多かったのですが、ワークショップ終了後には「全員が発揮していたほうが成果につながる」等、近年求められているリーダーシップのイメージに変化していました。また、「自分は聞くことはしっかりできているが、決断力が足りない」等、自分自身のリーダーシップの特徴について多くの学生が理解していました。

参加した学生たちは意欲が高く、積極的にワークに取り組んでいました。アンケートには多くの学生が「こうしたプログラムを学内でもっと体験したい」と記述していました。参加した学生の学びへの意欲・態度に、私含め立教大学の学生も大きな刺激を受けた一日でした。

アクティブ・ラーニング型の授業を実施する際に「うちの学生はおとなしいからできるかな」という声を聞くことがありますが、その心配が杞憂であることは多いと思います。学生が主体的に学ぶための環境をいかに構築するかが今後さらに大学教育において重要になることを実感しました。

舘野 泰一
（たての よしかず）

1983年生まれ。立教大学経営学部助教。青山学院大学文学部教育学科卒業。東京大学大学院学際情報学府博士課程単位取得退学後、東京大学大学総合教育研究センター特任研究員を経て、現職。博士（学際情報学）。大学と企業を架橋した人材の育成に関する研究をしている。具体的な研究として、リーダーシップ開発、越境学習、ワークショップ、トランジション調査などを行っている。近著に『アクティブトランジション 働くためのウォーミングアップ』（三省堂）がある。



今回、立教大学BLPワークショップに参加させていただきました、児童教育学科２年の M.T. です。昨年末に学修・教育開発センター（CRED）からのメールにてこの企画を知りました。メールをいただいた際、授業内のグループワークでの自分の振る舞い方について悩んでいました。また、入学当初から他大学の講義を受けてみたいという思いがあったため、すぐに申し込みを行いました。

当日は学年も学科も違う６人グループを作り、講義を受けた後にワークを行いました。講義のなかでは「権限なきリーダーシップ」という言葉を掲げ、従来の考えとは異なるリーダーシップについての考え方についての説明を受けました。この講義を受けるまで、リーダーとは先頭に立って他を導く人を指しているとばかり思っていました。しかし、リーダーシップにも多様な意味があり、大きいリアクションで場の雰囲気を良くすることや、話の脱線に気が付き修正することなど支えるリーダーシップもあることも知りました。

その講義を踏まえて行ったグループワークでは、発言するだけではなく聞くことや雰囲気を意識したため、自分の振る舞いがいつもと違うように感じました。私たちのグループでは、私の地元である山梨県を取り上げ、中国からの旅行者を呼ぶための旅行プランの設定やPRの手段を考えました。ワークの中では活発な議論が行われ、中国の経済を考慮した計画や、インターネットを活用したPR方法を取り入れた提案を行いました。

プレゼンテーション後のフィードバックでは、よかった点として「他の人の長所を把握して役割をまわせていた」「相槌をうって共感を示せていた」ことを挙げていただき、改善点として「もっと人に頼る方がいい」ことを指摘されました。私は今まで人前で話す経験を多くしてきたため、プレゼンテーションの大部分を一人で行ってしまいましたが、周囲からの言葉で改めるべき点を知ることができました。

当日を振り返ると、自分で申し込みを行い参加する企画であったためか、自ら発言するような積極的な人が多かったように感じました。しかし、集団のなかでは引っ込み思案で消極的な人がいることもあるため、そのような人に対する向き合い方に関してもっと考えていきたいと思いました。

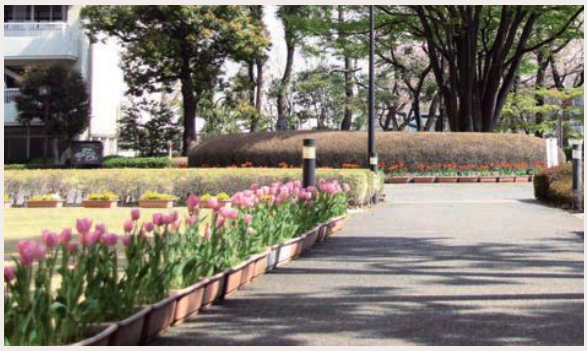
今回のワークショップにて、学生が主体となった学校づくりをするCREDの存在を初めて知りました。もっと多くの学生が今回のような企画に参加し、自己を見つめ、自己の力を発信することができるようになればと思います。

M.T.
児童教育学科２年

CRED TOPICS
クレッド トピックス

初の１・３年生調査実施

ＩＲ報告



「大学IRコンソーシアム」が企画する共通アンケート調査（以下、学生調査とよぶ）に本学が参加し、今年度で４年目を向かえました。毎年11月に実施している学生調査のうち、昨年度、１年生調査は３回目の実施となり、３年生調査は初の実施でした。ここで得られた３年生調査のデータと、同集団が１年次に回答した１年生調査のデータとを関連付けることで、今回初めて経年変化の分析が可能となりました。

平成28年度の東京家政大学FDフォーラム（2017年2月22日開催）におけるIRからの報告では、最新の学生調査のデータを、参加他大学との比較や過年度データとの比較、同集団の経年変化による分析を行い、報告しました。本稿では、同フォーラムの報告をもとに分析結果を示します。

入学前の学生の特徴

まず、入学前の本学の学生が高校３年次にどんな経験をしたのかを問う項目の回答からは、他大学の学生と比較した特徴として、「真面目さや素直さの面では高い傾向にある一方で、積極性や主体性の面では低い傾向」にあることが見えてきました。

具体的には、「授業の予習や復習、宿題をした」や、「自分の失敗から学んだ」という質問項目で、各選択肢に重み付けを行い（頻繁にした＝４点、時々した＝３点、あまりしなかった＝２点、全くしなかった＝１点）、平均値を算出したところ、過去３年とも参加大平均（2015年度、以下同）より高い値でした。（図１）与えられた課題や明らかになっている課題には、真面目に取り組む本学学生の姿勢がここでは見えてきます。

一方で、「授業中に質問する」や「自分の意見を論理的に主張する」など、積極性や主体性を伴う経験については、同様の平均値を算出したところ、いずれの質問項目においても過去３年とも参加大平均より低い値でした。（図１）

在学中の授業経験

次に、大学の授業における経験を問う項目の分析を行いました。そのうちアクティブ・ラーニングと関わりの強い、以下2つの質問項目の分析結果を示します。

１つ目は「学生が自分の考えや研究を発表する」経験について、前項同様に平均値を算出したところ、本学の昨年度３年生は、１年次（本学＝2.51点、参加大平均＝2.67点）においても３年次（同2.86点、2.94点）においても、参加大平均を下回っていました。全学的には学年が上がるにつれ発表の経験が増加していることがわかりました。（図2-1）

２つ目は「授業中に学生同士が議論をする」経験について同様に算出をしたところ、学年が上がるにつれ平均値は増加し（１年＝2.54点、３年＝2.85点）、３年生については参加大平均（2.77点）より高い値となりました。（図2-2）

１年生の授業にくらべ３年生の授業では実習や演習型が増えるというカリキュラムの特徴が、この調査結果に総じて表れていると考えられます。また、1年生調査の本学の結果では、2014年度より2016年度の１年生の方が、上記2つの質問項目とも平均値が上昇しました。同様の傾向は授業アンケートの集計結果にも表れており、授業レベルでの工夫が行われていることがわ

図1. 入学前の学生の経験

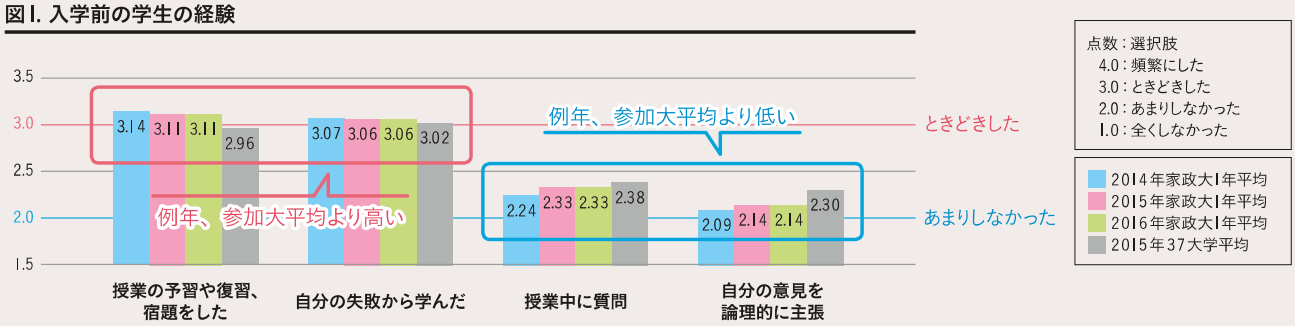
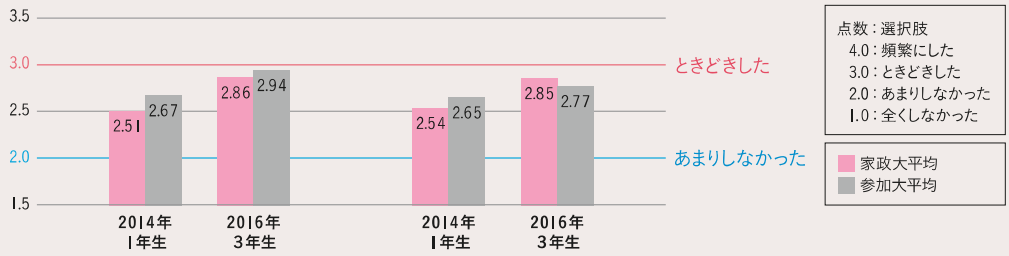


図2. 大学の授業における経験



【図2-1. 学生が自分の考えや研究を発表】【図2-2. 授業中に学生同士が議論】

かります。FDフォーラムでは、授業の工夫に取り組んでおられる先生方に事例紹介を行っていただきました。

学生自身の成長の実感

続いて、入学後の経験から身についた能力について学生自身の実感を問う項目では、回答を2016年度の3年生と2014年度の1年生とで比較すると、多くの項目で3年生の方が対象とするスキルや能力が身についたと答えていました。そのうち以下3つの質問項目の分析結果を示します。

「専門分野や学科の知識」の選択肢に重み付けを行い（大きく増えた＝5点、増えた＝4点、変化なし＝3点、減った＝2点、大きく減った＝ 1点）、平均値を算出したところ、1年生、3年生とも本学平均（1年＝4.24点、3年＝4.50点）は参加大平均（同3.95点、4.22点）と比較して、身についた実感が強く、3年次に上がると1年次より成長の実感はさらに強まっていました。（図3-1）

「コミュニケーション能力」について、同様に平均値を算出したところ、本学平均（1年＝3.55点、3年＝3.74点）は、参加大平均（同3.61点、3.80点）より下回り、3年次に上がると1年次より成長の実感は強まっていました。（図3-2）

「文章表現能力」についても、本学平均（1年＝3.25点、3年＝3.42点）は、参加大平均（同3.47点、3.66点）より下回りましたが、3年次には1年次より成長の実感は強まっていました。（図3-3）

入学前の学生の特徴にみられた「真面目さは強く、積極性は弱い」という面が、成長の実感においても現れた印象です。

まとめ

ディプロマ・ポリシーに示された学生像に学生を導くために、そのプロセスとなるカリキュラムが練られます。その際に、受講生となる本学の学生に合った教育を施すため、学生がもともとどのような経験や特徴をもっているのかを予め把握しておくことは必要条件となります。

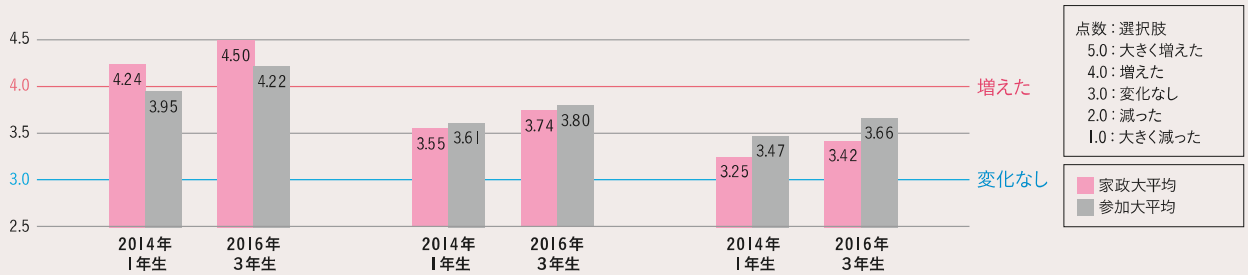
また、施行中のカリキュラムが有効的に機能しているのかを点検し続け、課題があれば対応を検討する必要があります。学生自身による「授業で経験した」あるいは「能力が身についた」という程度には明確な基準はありませんが、授業での経験や身についている程度は項目によって違いがあり、成果が上がっているものとそうでないものを特定することはできます。学生調査の調査項目は、学内の教育改革を進めるうえで、重点をおく取り組みを検討するための判断材料とすることができます。

以上を踏まえて、FDフォーラムの報告では学生調査の結果をもとに、「本学学生の入学前の特徴」「授業における経験」そして「成長の実感」の順に分析結果を解説しました。今後も、調査を継続し、教育の質保証に活かせるデータの提供を行ってまいります。

最後に、これまで学生調査へご協力いただいたみなさまに感謝申し上げます。本年度も11月頃に、学生調査を実施予定です。引き続きご協力のほど、よろしくお願いいたします。

宮 東城（みや はるき）
学修・教育開発センター

図3. 身についた能力



【図3-1. 専門分野や学科の知識】【図3-2. コミュニケーション能力】【図3-3. 文章表現能力】

manabaを通した栄養科e-learning推進計画

短期大学部栄養科は、平成29年度教育改革推進（学長裁量）経費による取組として、【manabaを通した栄養科e-learning推進計画】を実施しております。

「manaba」とは？と思う先生方も多いかと思いますので、簡単にmanabaを解説すると、インターネット上に各教員が担当する授業ごとのページがあるとお考えください。そこに、学生一人一人がIDとパスワードを使い入ることができ、先生からの授業資料の提供、小テスト出題、出欠確認などが可能です。教員が試験点数や成績を書き込むことも可能で、その評価は学生個人にしか閲覧できない仕組みになっています。このように、授業時間内に限らず【大学の学び】を活用できる、【e-learning】とよばれるシステムの一つです。本学のe-learningシステムといえば、大学で独自に制作された【e-kasei】のみでしたが、今年度から本学では、60校以上の有名国公立・私立大学が導入している株式会社朝日ネットが提供するmanabaを導入しました（本年度e-kaseiと同時運用）。栄養学科・栄養科では、このmanabaを積極的に導入しようという試みから、上記の取り組みを行うこととなりました。

しかし、manabaは今年度から導入するシステムであるため、本年度４月開始の授業から活用法をご存知でない先生に導入して頂くのは困難であることが予想されました。そこで、本取り組みの最初の実施内容として、急遽４月10日に朝日ネット様から教員への講習会を開催して頂きました。講習には本科14名の教員が参加し、その後私を含めた４名の教員が現在授業でmanabaを活用しています。私が授業で活用しているmanabaの機能は、主に【出席】【資料公開】【小テスト】【成績公開】【実習等による欠席届提出】【アンケート】です。これら機能の中でも、小テストはe-kaseiよりも容易に作成できます。さらにこれら機能の中で、出席とアンケートは専用のアプリである【respon】をスマートフォンにインストールする事で、学生がmanabaのページにログインしなくても容易に回答することができます。このようにe-kaseiと異なる点もありますが、基本的にe-kaseiと同じ内容が使用可能です。

ところで、manabaだけでなくこれまでのe-kasei等のe-learningを使用する上で大きな障壁となっているのが、学内Wi-Fi環境と学生のスマートフォン所持です。校内の一部講義室と実験実習室では、携帯電話の電波状況が悪く、通信ができないなどの問題があります。またなかには、学生の携帯電話契約条件やその使用状況によって通信速度に制限が生じるために、携帯電話からのアンケート回答や資料閲覧ができないなどの状況が生じます。そこで、本取り組みでは、授業中にWi-Fi環境を作り出す無線LAN装置を講義室・実験実習室で設置する計画を立てました。現在４名の教員が、持ち運び可能なその装置を設置・起動させることでWi-Fi環境を作り、この問題を解消しています。学生にも、通信料や速度制限を気にすることなく活用してもらっています。

さらに、現在ではかなり少人数になりましたが、フィーチャーフォン（世間一般ではガラケー）と呼ばれているタイプの携帯を所持している学生はmanabaとresponに参加することができません。この状況も解消する為に、該当する学生にはタブレット端末を貸出すことで授業中のe-learningに参加することを可能にしています。

今後は、私の授業でmanabaを使用した様子を学科内の先生向けに公開し、後期からこの取組に参入して頂く先生方を増やしていく予定です。また、現在活用している４名の教員間で現状授業での活用方法を共有し、新たな活用方法などを生み出していくことも目的としています。個人的なこれまでの感想としては、どんなe-learningシステムでも導入前の授業を完全に当てはめることは不可能と考えています。つまり授業内容や主旨を少し変え、e-learningを導入できる、または導入する事で活発な授業になるように、こちらからシステムへの歩み寄りが必要であると考えています。今後また皆様には、使用経過を報告できる機会を頂けましたら幸いです。

manaba資料公開例

manaba小テスト作成例

重村 泰毅(しげむら やすたか)

本学栄養科准教授、農学博士。担当科目：食品学各論・食品機能論・食品化学実験Ⅰ・食品化学実験Ⅱ・食品機器分析化学実験・他 / 研究テーマ：コラーゲンペプチドなどを摂取したヒト血液から吸収成分を検索し、その成分の機能性を細胞等で調べている。他には、食品成分をHPLC・LC-MSなどで測定している。

2017年7月発行　編集＆発行：東京家政大学 東京家政大学短期大学部　学修・教育開発センター
構成＆DTP：東京家政大学 ヒューマンライフ支援センター　坂本理恵
〒173-8602 東京都板橋区加賀1-18-1　TEL：03-3961-0284　E-mail：cred@tokyo-kasei.ac.jp